青少年赤十字の贈与活動にみる支援と国際交流

―― 戦後の広報誌の分析から ――

山　口　　睦

1．はじめに

本論は、終戦後から1970年頃にかけて日本の青少年赤十字が主にアメリカの青少年赤十字から贈られた「ギフト・ボックス」「スクールチェスト」の実態を機関紙の分析から明らかにするものである。

これまで、筆者は災害支援の中に贈り物による支援があることを指摘し、どのような機能があるかを分析してきた[山口2016、2018]。労働奉仕、救援物資の提供、医療サービスなど多様な災害支援の中で、「贈り物型支援」は次のようなものである。

たとえば、20世紀前半の日本社会では慰問袋という贈与形式が存在した。日露戦争期に日本社会に広まり銃後の国民から前線の兵士に、手拭などで作成した巾着に日用品や手紙、写真などを詰めて慰問のために贈った。この慰問袋は、単なる支援物資にはない贈り物的要素（包まれている未知の中身、楽しさ）、人格的関係性を導くしかけ（送り主の名前、住所、手紙の封入）によって、兵士の慰撫・鼓舞、国民の戦争参加、疑似親子・疑似恋愛の関係性の創出といった機能をもたらした［山口2012：150］。

このような慰問袋は、20世紀前半を通して兵士だけでなく災害被災者や病人、貧者など社会的弱者にも贈与されるようになった［山口2018］。自然災害の被災者へと贈与されるようになった慰問袋には、品物の多様性、贈り物的な形態（袋や箱などに詰める）、返礼・交流を可能にする手紙・贈り主の氏名・住所などの記載といった、贈り主のアイデンティティ、個別性の表出がみられる。この贈り主の個別性の表出が、贈り主と受け取り手の間に、単なる没個性的な物質的支援ではなしえない贈与交換による人格的交流、関係性を導くのである。

このように、戦災や自然災害をとわず「支援活動」において贈り物、贈与行為は重要な役割を果たしており、慰問袋だけでなく他の形式の贈り物型支援に関してさらなる研究が必要とされる。

また、災害支援において、贈り物型支援だけによらず、多様な支援活動が行われ、その後支援を受けた被災地が別地域における新たな災害に対して「恩返し」と称した支援活動、「地域間贈与」を行うことが古今みられる［山口2016］。たとえば、1923年の関東大震災で受けた支援のお返しとして1934年関西風水害において関東、東日本から近畿、西日本へ支援を行う、という表現が確認された。

この地域間贈与は、国内に限らず国際的支援でもみられる。たとえば、特定非営利活動法人難民を助ける会（AAR Japan）が1993年から行っている「愛のポシェット」運動というものがある（注1）。この活動は、1992年に内戦が終結したカンボジアの子どもたちのために、文具や日用品を詰めた布製のポシェットの作成を募ったものだ。この発想のもとになったのが､戦後アメリカの青少年赤十字から贈られたギフト･ボックス、スクールチェストだった。愛のポシェット運動の発案者である吹浦忠正（難民を助ける会代表幹事）は、秋田県の小学生だったときに日本赤十字社秋田県支部を通じてギフト・ボックスをもらったという。その様子は、次のように描写される。

> 一個一個の「ギフト・ボックス」の中身が全部ちがっていました。きっとそれぞれをつくってくれた人が愛情をこめて工夫してくれたのだと思います。一つ一つが宝物の箱に見えました。「スズメのお宿」から親切なおじいさんがいただいた「つづら」の小さなもののようにも思いました。なかでもおどろいたのは石けんでした。すばらしい香りがするんです。今でもわすれられません［柳瀬1995：38］。

このように戦後アメリカの若者からギフト・ボックスをもらった体験が、1990年代当時困っているカンボジアの子どもへのポシェットの支援へとつながっている。

> 今、カンボジアでは平和が近づきつつあるが、あのころの日本とおなじではないだろうか。全国の人たちによびかけて、四〇何年か前にアメリカの人たちが日本の子どもたちにしてくれたことを、今度は日本人が、カンボジアの子どもたちのためにやろうじゃないか［柳瀬1995：39-40］。

このギフト・ボックスについては、『日本赤十字社社史稿第6巻』に次のように記されている。1947年ギフト・ボックス（石けん、タオル、文具、おもちゃ）5万個、スクールチェスト（鉛筆、消ゴム、ノート）50万組がアメリカ青少年赤十字から贈られた。それらは、南海地震、関東･東北の水害地の4年生以下の児童、養護施設、スクールチェストは戦災を受けた全国の5，6年生に贈られたという。また、1949年にはギフト・ボックス5万個がアメリカ青少年赤十字から贈られ、児童養護施設に収容されている児童に配られた［日本赤十字社1972：369-370］。ギフト･ボックスやスクールチェストについては、以上の記述、後述する日本赤十字情報プラザでの展示などに限られており、その実態については明らかではない。

この事例を整理すると図1のようになる。つまり、第二次世界大戦後にアメリカか

らギフト・ボックスやスクールチェストをもらった日本人の子ども（吹浦忠正）が、長じて1990年代にカンボジアの子どもたちに同じように贈り物をしようとした、ということである。

このような現象は、特に災害被災地における事例について、「被災地のリレー」［渥美2012］、「一般交換としての震災ボランティア」［三谷2015］と呼ばれる。渥美公秀は、日本社会におけるボランティア元年と呼ばれる1995年の阪神・淡路大震災を起点として、その後の中越地震（2004年）、中越沖地震（2007年）、東日本大震災（2011年）などにおいて、災害ボランティアの救援活動を体験した元被災者が、次なる被災地の人々に対して利他的な行動を展開する現象を「被災地のリレー」と称した［渥美2012］。また、三谷はるよは、レヴィストロースによる2者間の直接の資源のやりとりを含まない一方的贈与の連鎖を意味する一般交換という理論を利用して、災害ボランティア行動を「第三者への恩返し」として分析した［三谷2015］。

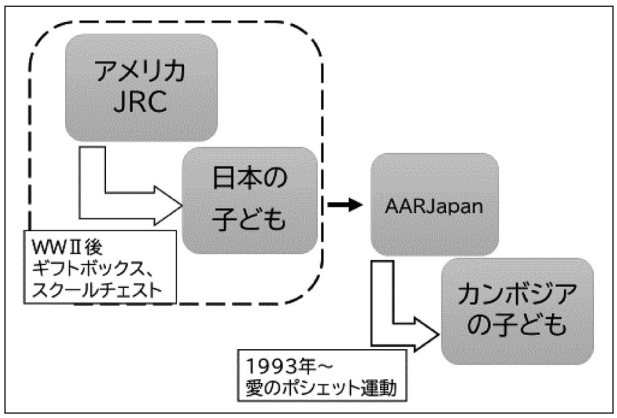

図１．国際支援における善意のリレー

本論は、これらの視点にもとづき、図1に示された国際支援における善意のリレーの第一段階（点線部分）の具体的様相を、日本青少年赤十字の機関紙から明らかにすることを課題とする。

２．青少年赤十字の成立と活動

2.1　青少年赤十字の設立

赤十字社は、1863年に設立された［小池2010］。1859年、赤十字社の創設者となるスイス人の実業家アンリ・デュナンは北イタリアで起こったソルフェリーノの戦いに遭遇した。その悲惨さに衝撃を受けて、彼は戦闘が終了したあとの戦場の悲惨さや敵味方とわず放置される戦傷者の様子を具体的に描いた『ソルフェリーノの思い出』を

記した。その後、デュナンは、戦争や国家を批判することなく「戦時において戦うことができなくなった戦傷兵、戦病兵を敵味方の差別なく救護する人道団体を設置しておく」ことをめざした［小池2010:18］。1863年に国家から独立した団体として、ジュネーブの名士たち5人からなる「5人委員会」が創設された。翌年には、スイス政府が主催してアメリカをはじめとする16か国がジュネーブに会合し、白い腕章に赤い十字のシンボルマークが作られ、ジュネーブ条約（赤十字条約）が締結された。その内容は、「戦場における病院、救急車、医療従事者は中立化され、赤十字の標章が保護される物（者）を示し、敵兵も自軍兵士と同じ救護を受けられること」である［小池2010：21］。小池政行は、赤十字の人道原理は、戦争根絶を目指す平和運動ではなく、兵士だけでなく民間人をも含めた総力戦へと変化しつつあった戦争を前に「人間性の一つの特質」として敵味方双方にモラルの遵守を取り入れようとした試みであると指摘する［小池2010：22－23］（注2）。この点は、後述する戦時下、戦後における日本赤十字の活動に関連する。

日本赤十字社が設立されたのは1877年、明治政府と旧薩摩藩の士族が戦った西南戦争がきっかけとなっている。元老院技官の佐野常民が、ヨーロッパ視察で見聞していた国際赤十字活動を参考にして、日本においても敵味方を区別しない傷病者救護を目的とした赤十字事業を展開すべく、熊本司令部にいた有栖川宮熾仁総督官に博愛社設立の趣意書を提出し許可を得た。1886年に日本政府はジュネーブ条約に加入し、博愛社の社名を「日本赤十字社」と改め、赤十字国際委員会の承認を受け国際赤十字の一員となった［滋賀県青少年赤十字のあゆみ編集委員会　2017：18］。日本赤十字社の事業内容は、設立の契機となった西南戦争をはじめとする戦時救護、1888年の磐梯山爆発救護からはじまる災害救護、平時の医療事業、看護婦の養成、結核予防、母子保護、血液事業、民間の活動として家庭看護法や水上安全法などの講習会、赤十字奉仕団、青少年赤十字、赤十字博物館と図書館、報道活動、国際活動などがある［日本赤十字社　1979］。国際紛争時における救護を主たる活動としていた他国の赤十字社と異なり、日本赤十字社では自然災害時や平時の活動も併せて発展した。

少年赤十字は、欧米における児童･生徒の活動からはじまる。第一次世界大戦時に、カナダ、アメリカ、オーストラリア、イタリアで児童・生徒が戦時中の軍隊慰問や赤十字事業（患者用衣類の作成、病院で使用する包帯巻きなど）に参加する組織ができたが、終戦とともに解散した。その後、国際救援の重要さと国際的視野の拡大という教育効果が認められアメリカでは活動が継続、再組織化された。1919年に赤十字社連盟が生まれ、少年赤十字が重要事業に加わり「すべての赤十字社は、赤十字事業のために、その国の少年を養成すべし」と決議した［日本赤十字社　1979：322－323］。

赤十字社連盟総会で決議された少年赤十字の設立に関する内容は次のようである（下線引用者）［日本赤十字社　1929：991－993］。

「某少年赤十字は児童に平和の理想実行的社会奉仕の観念特に自他保健に関する奉仕の観念を涵養し又国民として竝人間としての義務を理解体得せしめ且各国児童に対し友情ある救助を為すの精神を涵養し且之を保持せんとの目的を以て組織せられたるものなり」

「各国赤十字社少年団の間に於て文書及作製品の交換を為すことに尽力せんことを望む」

「赤十字博愛精神の涵養に勗めしめ又世界平和の為には各国児童互に親睦の情を表し且相互扶援の友情を以て通信の交換を為すことを目的及事業たらしめん」

日本赤十字社はこの決定を受けて、少年赤十字結成の趣旨を全国支部に通知した［日本赤十字社1957：362－363］。また、文部省をはじめとする各機関に相談し、少年赤十字の趣旨・目的が国民教育に良好な影響をもたらすことを認め、学校内の設団に合意が形成された。1922年には本社から各学校に「日本赤十字社少年赤十字の実施に関する件」を通知し、「少年赤十字の目的は、小学校時代において博愛の思想すなわち他人に対する助力ならびに相互擁護の精神を涵養し、かつ自他の衛生上に留意せしめて、健康の増進を図らんとするにあり」とし、小学校5，6年生を対象とした一学校一団体を結成し、校長を団長にするように依頼した。同年、日本初の少年赤十字団が滋賀県守山市の守山小学校で結成され、翌年には日本全国で939団、会員数は21万158名へと急拡大した。1934年に第15回赤十字国際会議が東京で開催されたときには、全国から少年赤十字の代表5,000名が集まり、歓迎会や作品展などを催した。これを契機として少年赤十字の団組織が小学校から、中学校、高等女学校、青年学校にも拡大され名称が「青少年赤十字」となった。

2.2　青少年赤十字の活動内容

日本における青少年赤十字の活動は以下の3つの時期に分けられる。

第1期　設立から終戦（1922年から1945年）
第2期　終戦から1970年
第3期　1971年から現代

第1期（1922～1945）の活動は、赤十字事業の談話、衛生の談話、災害疾病の慰問・手工品の寄贈、外国児童との国際通信交換、講話会などの行事開催などがあげられる［日本赤十字社　1929：995］。

たとえば、災害義捐活動として、1936年から1940年までに義援金3万3,154円93銭、義援品3万871点を贈った。また、国際親善活動として、1939年、1940年に中国の学童・生徒へ学用品24万9千点、手紙1,550通を贈った。戦前の活動の特徴としてあげられる軍事奉仕として、1936年から1945年までに青少年赤十字団員が在外将兵に贈った慰問金品は、慰問金3,937円65銭、慰問品98万3,242点にのぼる。ほかに赤十字救護班慰問、国防献金、飛行機献納きょ金などにも多大な協力をした［日本赤十字社　1979：324］。

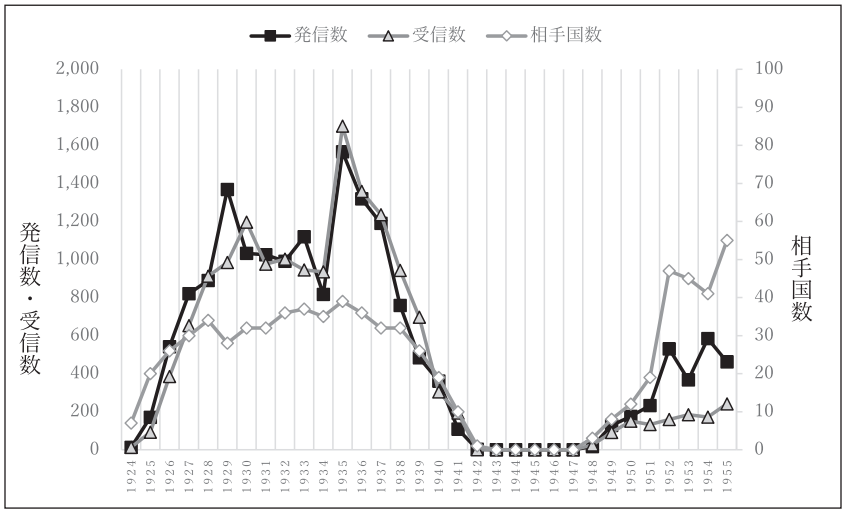

図２．20世紀前半の日本青少年赤十字の通信数

（［日本赤十字社　1957：380］［日本赤十字社　1969：281］より作成。）

以上のような活動を活発に行っていた日本の青少年赤十字団であったが、1937年の日中戦争開始以降、徐々に活動が停滞していった。図2は、国際通信の発信、受信数をグラフにしたものである。発信数、受信数はおおむね対応しており、相手国数も4年目に30か国を超えてその後減少に転じる1939年まで30数か国で推移している。1935年が相手国数、通信数で最多となっているのは、前年に日本赤十字社で国際少年赤十字展覧会を開催したためである［日本赤十字社　1957：880］。その後、国際通信数は1939年以降急激に減少して、1943年に中止された。団数、団員数については、1935年を頂点として、1936年に8,698団、団員数308万6,337名が、終戦時の1945年には、1万25団、団員数は356万2,406名となっている（図3）［日本赤十字社　1969：270－271］。

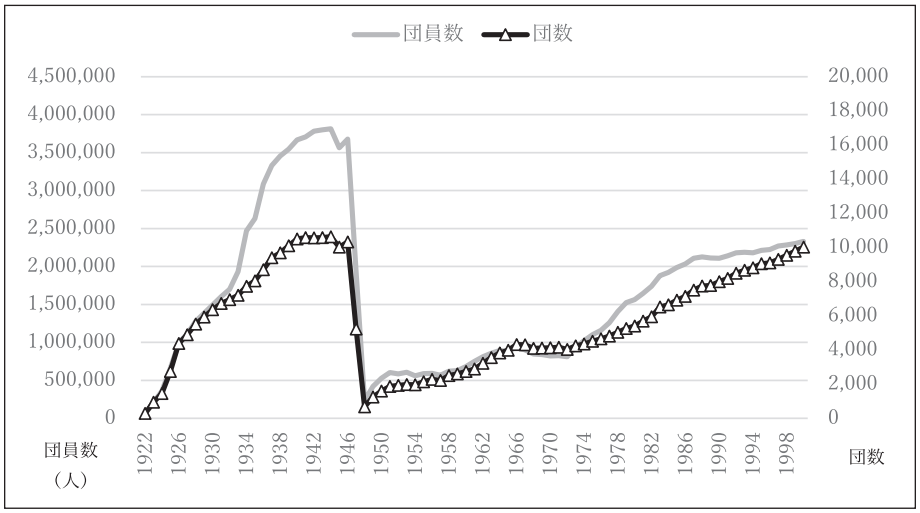

図３．20世紀の日本青少年赤十字団、団員数
（［日本赤十字社1957、1969、1972、1986、1988、1992、1999、2011］より作成）

第2期（1945～1970）となる戦後には、学制改革がありアメリカ赤十字本社から派遣されてきた顧問の意見をとりいれて、1948年に新たに「青少年赤十字の手引き草案」を作成した。よい公民の意義を十分に理解体得させる、健康と安全とを保持増進する、郷土社会・国家および世界に対する奉仕、親善の精神を育成する、を目的として設定して再出発した。この時期の活動内容は、以下の5つに分類できる［日本赤十字社1979：326］。

一、国際理解・親善、交流に関する活動
二、奉仕に関する活動
三、健康・環境保全に関する活動
四、安全に関する活動
五、その他青少年赤十字の趣旨にあった活動

戦後の学校教育においては、社会科、道徳、教科外の特別活動が重要視されたため、国際理解や親善、交流といった青少年赤十字の活動が評価され、メンバー数が増加していた。しかし、1965年以降、指導要領の改定による自主的活動時間の縮小、教員による放課後の指導活動への制限などにより青少年赤十字のメンバー数は減少に転じた。

第3期（1971～現在）には、活動減退に対する改革が行われる。本社は、事態を重く見て青少年赤十字の振興策を検討した。社内に設置された社業振興懇話会の働きか

けにより文部省初等中等教育局長から「公立義務教育諸学校が青少年赤十字に加盟、指導することは差し支えない」との公文を得た。次いで1971年には、青少年赤十字中央審議会が本社に設置され、当時の教育事情に適合した青少年赤十字の意義・性格と具体的な振興策、指導者の養成、情報資料の整備について検討した。これらの検討の結果､1973年に新たな青少年赤十字の目的として「青少年が赤十字の精神に基づいて、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、青少年自身が日常生活の中で望ましい人格と精神を自ら形成すること」と定め、世界の青少年赤十字に共通している実践目標として下記の3点をあげた［日本赤十字社　1979：328－329］。

一、生命と健康を大切にする―健康・安全
二、人間として社会のため、人のために尽くす責任を自覚し、実行する―奉仕
三、広く世界の青少年を知り、仲良く助け合う精神を養う―国際理解・親善

これらの改革の効果があり、1974年にはメンバーが100万人を超えた。最新の数字として、日本国内で青少年赤十字に加盟している学校は1万4,435校、会員数は340万5,451名である（2019年3月）。

第3期における活動内容をまとめたものが表1である。また、情報誌「Junior Red Cross Information2019」（青少年赤十字指導情報）から具体的な活動を拾ってみると、ネパールスタディーツアー、高校生による体験型防災イベント、トレーニング・センターの活動報告、日本各地の青少年赤十字の活動報告、2018年に東京で開催された国際交流集会の報告などが掲載されている。

表１．青少年赤十字の活動（［日本赤十字社　1979：331－332］から作成）

分類	内容
国際理解・親善、交流	アルバム、スタンプ・カード、グリーティング・カードの作成、使用済み切手の収集、発展途上国への学用品送付
奉仕	1円募金、病気見舞いカードの作成、施設訪問、ギフトバックの作成、視覚障害者への読書・点訳活動、在宅老人・身障児の訪問
健康、環境保全	校内美化運動、緑化運動への協力、花壇の世話と草花の活用、小学校の手洗い・歯みがきの奨励
安全	登下校時の安全パトロール、救急法などの習得と運動会などでの活用
その他	トレーニング・センターへの参加、青少年赤十字連絡協議会への参加、レクリエーションや点字等の技術講習への参加

本論では、この第2期に発行されていた情報誌『青少年赤十字』を利用して、当該時期の青少年赤十字の贈与活動を描き出すこととする。

３．『青少年赤十字』にみる贈与活動

3.1　日本赤十字社の機関誌

日本赤十字社の機関紙、広報資料には、次のようなものが存在する。出版物としては『日本赤十字社社史稿』、『人道―その歩み　日本赤十字社百年史』がある。ほかに、『日本赤十字』（1891年12月～1913年10月）、『博愛』（1913年11月～1951年6月）、『赤十字新聞』（1949年8月～）、『少年赤十字』（1926年1月～1939年1月）（注3）、『青少年赤十字』（1949年1月～1971年8月）、『青少年赤十字指導情報』がある（注4）。本論では、戦後の青少年赤十字の活動を明らかにするために『青少年赤十字』を取り上げる。なお、本文の引用に際して旧漢字、旧仮名遣いを新漢字、現代仮名遣いに改める。

『青少年赤十字』は、1949年1月に創刊され、1971年8月発行の195号をもって後継誌に引き継がれる。正確な月刊ではなく、2か月続きの合併号が刊行される、途中から「上級生号」「下級生号」に分かれるなど内容や形式には変化がある。創刊号の内容は次のようである（表2）。

表２．創刊号の内容

タイトル	著者	内容
空は世界へ（団歌）		楽譜、歌詞
あたしが大きくなったら	国際通信より	カリフォルニアの小学生の書いた詩、通信アルバムより
人間を愛した人々（クララ・バートン）	村岡花子	アメリカ赤十字の総裁クララ・バートンの生涯
日本青少年に贈る	M.C.クック	米国赤十字国際事業部長、日赤顧問からメッセージ
アメリカのお友達が聞きたいこと	国際通信より	ワイオミング州のアルバムにある質問
青少年へ	ジョルジュ・デュアメル	フランス学士院、メッセージ
第十七回国際会議から帰って	島津忠承	日本赤十字社長、報告
トレイニングセンター		説明
赤十字旅行の思い出	工藤忠夫	日本赤十字社外事部長、ストックホルム開催の第17回赤十字国際会議、ワシントン
怒るひまはない	ウィリアム・R・デラバア	アメリカJRCニュースより、物語
団員の頁		共同募金と登録費、登録費の調達方法
国際通信（日本からアメリカへ）		日本のアルバムからアメリカの団員へのメッセージ、絵画
国際通信（アメリカから日本へ）		アメリカのアルバムから日本の団員へのメッセージ、絵画
トレイニングセンターの思い出		参加した体験談
火事はおそろしい	折井謙吾	火事の注意事項
先生の頁		指導計画表
ニュース		各国の活動紹介、デンマーク、英国、インド、アメリカ、カナダ、オーストラリア、スイス

大海原の中に落ちたしずく	V・ミロヴィッチ	ロシアの民話
各地だより、本部だより		各地活動報告、本部からの呼びかけ
団員表図		都府県別団員数
カレンダー		

国際通信や海外の友達からの質問といった項目で言及されている「アルバム」とは、国際親善のために、各学校などを単位として活動や生活を紹介するために作成された、写真や絵画、メッセージなどからなるアルバムのことである。そのアルバムを各国のJRCの団体に送るのである。これらの活動は、各団体ごとに行われており、基本的に本社に現物は残っていない。2019年において、支部から寄贈されたものが情報プラザに1点保管されている（写真1、2）（注5）。

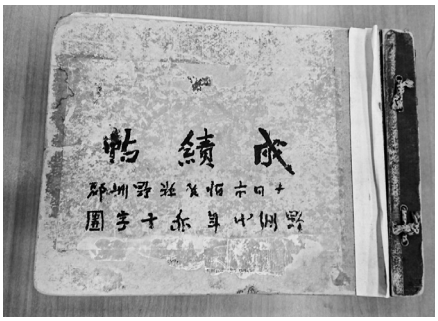

写真１．アルバムの表紙
（2019年8月撮影）

写真２．アルバムの中味
（2019年8月撮影）

『青少年赤十字』の編集発行人は、日本赤十字社青少年赤十字課の本庄俊輔となっている。「本部だより」には次のように記されている。

> どうぞこれからは皆さんの雑誌として大いに活用して下さい。青少年赤十字団も始めは大人がその組織をつくりましたが、団が出来てからは少年少女の皆さんの手で立派に活動をしています。それと同じように此の雑誌も第一号は大人の考えでつくりましたが、次号からは皆さんの力によってほんとうに自分のものとしてもっと良いものにして下さい。それには皆さんの研究や団の活動状況、お話、歌や詩や画、意見などをどんどんよこして頂きたいのです。それは雑誌を良くするばかりでなく青少年赤十字全体を良くすることになるのです［青少年赤十字1号　1949：38］。

次に、この『青少年赤十字』の誌面から抜き出した贈与活動をまとめたものが表3である。贈与機会としては、戦災、自然災害（水害、火事、台風）、外来祝祭（サン

表３.「青少年赤十字」にみられる贈与事例

年	機会	贈り手	受け手	ギフトボックス	スクールチェスト	文房具	その他
1948		アメリカ	フィリピン		○：100箱		
1949		アメリカ	オーストラリア		○：41箱		
1950	戦後	アメリカ	日本	○：2万5千個			
		アメリカ高等学校JRC団員			○：40箱		
	クリスマス・イースター	日本JRC	国連軍傷病兵				飾り物
		神戸湊山小学校	神戸養老院				毎月の慰問
1951	お礼	日本	アメリカ				中身の注意喚起
	サンクスギビング	日本	国連軍傷病兵				飾り物
		フィリピンJRC団員	日本				人形
		日本津久戸小学校6年生	フィリピン				人形、アルバム、画
1952		アメリカ	日本	○：3万個			
1952	水害	日本	アメリカカンザス				人形、手工品を9箱
1953	九州近畿地方水害	アメリカ	日本	○：3万70個	○：13箱		
	九州近畿地方水害	カナダ	日本				1万ドル
	九州近畿地方水害	沖縄久茂地小学校団員	日本				6千余円、慰問品
1953	ハロウィン	日本	アメリカ赤十字病院				飾り物3万点
1954			名古屋市立大生小学校	○			
	水害	オーストラリアJRC団員	ベルギー、イギリス、オランダ				義捐金
	ギフトボックスのお礼	日本	アメリカ				人形、コケシ、カルタ
1955		アメリカ	ハイチ	○			
	盲人	アメリカ	日本				おもちゃ
	火事	徳島県佐古小学校JRC	全半焼した6戸の児童				衣類、学用品、見舞金
		大分県JRC	病人、恵まれぬ子ども、老人				人形、花束
1956		日本	ソ連	○：50個			
		日本	中国	○：50個			
		日本	アメリカ	○：50個			
	火災	アメリカ	青森県大館市の火事で被災した子ども達	○：1000個			子供服100着、見舞金54万円
		ソ連 ⇔	日本JRC				アルバム、絵葉書、衛生双六、レコード、絵本、絵画
1958	水害	アメリカ極東本部	静岡県大東小学校、大仁小学校	○			
1960	15号台風災害	在日アメリカJRC	名古屋市南光中学校、白水小学校	○：2万5000個	○：100箱	○：5000ドル相当	
	15号台風災害	日本JRC	愛知県の被災児童			○：鉛筆1万800本	
	15号台風災害	成増アメリカンスクール	大浜小学校			○	
		カナダJRC	日本JRC団員の奉仕作業				5000ドル

クスギビング、ハロウィン）がみられた。形式としては、ギフト・ボックス、スクールチェスト、ギフトバック、慰問袋がある。対象としては、国内、国外の子ども、障害者、復員兵、傷病兵である。贈与の主体は、アメリカ、カナダ、日本の少年赤十字の団体やメンバーとなっている。次に贈与機会、贈与形式、贈与対象について詳細をみていく。

3.2　贈与機会

贈与機会については、戦災、自然災害、外来祝祭がみられた。

3.2.1　戦災

『青少年赤十字』誌上において確認できる、日本の少年赤十字が海外から受けた最初の支援は1950年のことである。8号（1950年3･4月号）には、「来ました！来ました！ギフト・ボックスの山!!」と題した記事がある。アメリカ青少年赤十字から縦9インチ（約23㎝）、横4インチ（約10㎝）、深さ3インチ（約8㎝）、2，3ドルの品が入っているギフト・ボックスが2万5千箱贈られた。そもそもギフト・ボックスとは、アメリカのJRC団員が、もうけたお金や余ったお小遣を本社に積立てたナショナル・チルドレンス・ファンド（全国児童基金）を利用した事業である。ギフト・ボックス、スクールチェストの項目で後述するが、アメリカの青少年赤十字は1945年から世界各地の戦災で被害をうけた子どもたちに支援を行っている。その動機は、次のように記されている。

> 今は戦争の後で、むかしの敵も味方も区別なく、世界にはあれも無い、これも足りない子供たちが一ぱいいます。アメリカのJRC団員は、この時とばかり、このお金で、よその国の子供たちがほしがりそうなものを、いろいろ思いやりながら買い集めてギフト・ボックスにつめるのです。『あのお国は油がとれないから、きっと石鹸が足りないでしょう。』と御相談にのって下さるのは先生です。こうして地理や歴史を、愛情と興味で勉強する青少年赤十字です［青少年赤十字8号　1950：7］。

当時の日本青少年赤十字、東京支部には5,600人ほどの団員がおり、都内児童養護施設のうち、36か所が選ばれてギフト・ボックスが贈られた。たとえば、中野区鷺の宮にあった戦災孤児救護婦人同志会「愛児の家」に、新宿区落合第四小学校第3班の5年生2人、4年生4人、3年生6人、2年生2人の計16人が、ふろしきに包んだ27個のギフト・ボックス、自分たちが用意した学用品を持って訪問した。4才から17才まで52人

の児童が合唱をして迎え、団員は、ギフト・ボックスの説明をして贈った。その様子は、次のように形容されている。

愛児の家のお友だちはとても、お行儀がよく、山とつまれたギフト・ボックスのまわりに集まって、拍手をうちながら、アメリカのお友だちからの心づくしを見いっていました［青少年赤十字8号　1950：10］。

一番年したの四つになるお友だちは、三つの豆自動車やビー玉などを、あんよの前にならべて、一生けんめいに遊んでいます。男の子たちは手に手にヨーヨーを持って、あたたかな日のあたるろうかで、お互いが上手だと、じまんしあっています。赤いくしでかみの毛を静かにとつているかわいらしい女の子のすがたもみられます［青少年赤十字8号　1950：11］。

1945年から1950年までにアメリカの青少年赤十字が世界に贈ったギフト・ボックスは、266万4,342箱、受け取った国の数は40か国であった。1箱2ドルとして532万8,684ドルを費やしたことになる（69号1956年下級生号）。スクールチェストは、1947年から48年にかけて北アトランティック、北パシフィックの両地区で試験的にはじめられ、当時は毎年アメリカの全青少年赤十字で行われていた。1950年には、40箱が日本に送られ、1949年にはオーストラリアに41箱、ドイツ、フィリピンなどにも100箱送られた（89号1958年12月小学生用）。

このように、第二次世界大戦後に戦災を理由とした青少年赤十字による支援活動は、アメリカのギフト・ボックス、スクールチェストの贈与から始まり、敗戦国も区別せずに贈られ、世界の戦後復興に大きな役割を果たしていたといえる。

3.2.2　自然災害

1950年代には、自然災害への支援活動が海外から日本へ、そして日本から海外の被災地への支援活動も行われるようになった。水害、火事、台風への支援活動が認められる。

たとえば、1951年夏にアメリカカンザスで起こった水害に対して（注6）、スイス赤十字連盟から日本からも児童慰問品を贈らないかと依頼があり、早速団員作品の人形、手工品を9箱、航空便で送った。同年12月にはアメリカから礼状と写真が送られてきた（24号1952年2月下級生号）。写真には、次のような説明が付されている。

昨年お送り下さいました日本のおもちゃや人形は、カンサスの中西部水害地の子供に分配しました。その時の写真をお目にかけます。この写真はその一部ですが子供たちは大喜びで、外国の人たちも自分たちのことを心配してくれていることがはっきりわかったようです［青少年赤十字24号　1952：2］。

1953年の九州近畿地方水害に対して各国から慰問品が贈られている（40号1953年10月上級生号）（注7）。カナダJRCは、水害地の学校の生徒のために1万ドルを日本赤十字社に送付した。日本赤十字の本社ではJRCの国際性をふまえて、学校の勉強にプラスになるものをと考えて、関係者と相談して書籍（世界の国々16巻）を水害地学校650校におくった。また、アメリカJRCからは、ギフト・ボックス3万70個、スクールチェスト13個が送られてきた。これらは、同じく水害地の学校に分配された。カナダやアメリカといった国外からだけでなく、沖縄の那覇久茂地小学校団員からも現金6千余円、慰問品が贈られてきた。その感想は次のように記されている。

本社の本庄先生もその席においでになり、この団員たちは苦しい生活の中でこんなにも慰問の金品を持って来たので、胸にせまるものを感じたと語っている［青少年赤十字40号　1953：20］。

当時も世界各地で毎年のように自然災害が起こっており、ヨーロッパでの支援活動について次のように報告されている（48号1954年６月上級号）。1953年2月にベルギー、イギリス、オランダをおそった水害に対して、オーストラリア青少年赤十字が団員によびかけて救済義捐金を集めた。予想外に多額の募金が集まったので一軒の家を建築、水害の罹災者を収容、その後国際的青少年赤十字の会議場として利用している。こういった他国間の支援活動の報告は日本青少年赤十字の団員へ影響を与えたと考えられる。

大規模な水害の他に、国内の火事に対する支援活動も行われている。たとえば、徳島県佐古小学校では、1955年1月30日夜に起こった火事で、6戸が全半焼、6人の小学生が服、学用品が焼ける被害を受けた。佐古小学校子供赤十字委員会では「かわいそうなお友達をたすけよう」と友情運動が起り、2日間で全校2,400人の生徒が衣類、学用品、見舞金をもちより、罹災児童に贈られた（57号1955年7月下級生号）。

着のみ着のままで焼け出されて、学校へも行けないお友だちを助けようと、自分の衣類を分け合い、学用品をさき、お小使いを出し合った友愛のプレゼントは、最近

のうれしい話題となっています［青少年赤十字57号　1955：21］。

また、1956年には、秋田県大館市の火事で被災した子どもたちへ、アメリカ青少年赤十字から見舞品が贈られている（73号1956年9月下級生号）（注8）。ギフト・ボックス（歯ブラシ、石鹸、タオル、文房具、おもちゃ）1,000個、子供服100着、見舞金54万円が贈られた。また、岐阜の国際センターで大館の火事について知った参加者も見舞金3,200円を寄付した。

1959年9月26日に紀伊半島先端に上陸した台風15号（伊勢湾台風）は、台風災害として明治以降最多の死者、行方不明者5,098名をだした。伊勢湾台風に対する支援活動は、海外、国内の両方からなされた（99号1960年1月下級生号）。台風が来襲した9月26日の翌朝である27日の午前8時半に在日アメリカ赤十字の職員がかけつけてきた。5,000ドル（179万1000円）相当の文房具寄贈、ギフト・ボックス2万5千個、スクールチェスト100箱を届けた。その様子は、次のように記述される。

それもただお金を寄贈して日本側で買えというのでなく、在日アメリカン・スクールのJRC団員が、米赤本社のJRC活動資金の中から委託されたこのお金で、文房具を買い求め、自分達で荷造りして名古屋に持っていくというふうに、JRC団員自身の奉仕に意味があるわけです［青少年赤十字99号　1960：18］。

伊勢湾台風では全国に被害があったが、特に愛知県と三重県に被害が集中した。職員だけでなく、青少年赤十字団員3名が台風で被害を受けた名古屋市の学校を訪問したという（100号1960年1月上級生号）。朝9時半3人の団員が米軍用機で名古屋小牧飛行場に到着し、出迎えのJRC団員に案内されて、市内の南光中学校と白水小学校を訪問した。窓ガラスは破れ庭木は折れ、壁はおち当夜の水の恐怖をいまだに物語っていたという。

また、東京の成増アメリカンスクールにおいて5年生が中心となり生徒が文房具を購入し、JRCの手で名古屋の加盟校、大浜小学校に贈られた。両校は姉妹校になったという。

アメリカの他には、カナダのJRCから5,000ドルが寄贈され、日本JRC団員の奉仕作業に対する援助として使用された。東京や罹災地の教師と相談し、この寄付金で材料を購入し工業高校の生徒が学級文庫用本箱を製作、他に運動用具を購入した。

国内においても、JRC活動資金を災害や国際親善のために本社につみたて、10万円以上たまったので15号台風災害の愛知県の被災児童へ、鉛筆1万800本を購入し贈るこ

とにしたとある（99号1960年1月下級生号）。

伊勢湾台風へのアメリカやカナダの救援から学んだこととして、下記が記されていた（下線引用者）。

> JRCの救援は飽くまで、青少年による、青少年へのものであること。つまり大人から青少年に対するものとは、ちがっていなければならない。…中略…
> 一刻を争う衣食住の個人的な救援は、大人の力にまつとして、JRCの行う救援は、飽くまで教育的であり、学校単位のものであること。…中略…
> 国の内外を問わずそそがれる厚意をすなおに、感謝して受けましょう。その人はまたいつの日にかすなおに、温く、捧げることが出来るのです［青少年赤十字99号1960：18］。

ここでは、大人が行う食料や衣類などの支援との違いが認識され、特に児童に向けた文房具や教科書などの支援に特化していること、支援を受けることの重要性、そして、将来における返礼の可能性、必要性が指摘されている。

3.2.3　外来祝祭

クリスマスなどの外来祝祭の受容は、明治以降徐々に拡大してきた［山口　2012：226－237］。『青少年赤十字』では、サンクスギビングとハロウィンがみられた。

16号（1951年6月下級生号）には、「国連軍傷病兵慰問品の作り方（サンクス・ギビングのかざりもの）」と題して見本の写真入りで記述がみられる。記事によれば、前年（1950年）にも「クリスマス・イースターに多くのかざりものを作って贈り、とてもよろこばれました」とある。サンクスギビング行事の由来が説明され、ピルグリム（巡礼）の男女、七面鳥、うずら、鹿、野兎、野菜のたべものなどを、紙で平面的に、もしくは布で立体的なものをつくるもよいとされている。贈る相手は、「国連軍の傷病兵」とある。

ハロウィンの飾りについては、アメリカ赤十字の病院に送られた（33号1953年1月上級生号）。1952年には、全国の団員がハロウィンの飾りを合計3万点作ったとあり、アメリカとのやりとりの頻度が高かったことが分かる。

外来ではないが、戦後に新しく制定された「敬老の日」に、神戸の湊山小学校では神戸養老院に毎月慰問に行くことにしたとある（16号1951年6月下級生号）。

以上から、青少年赤十字における支援活動が行われた機会は、第2次世界大戦以後の戦災、自然災害が多かったことが指摘できる。

3.3　贈与形式

3.3.1　ギフト・ボックス

前節で、日本の青少年赤十字が海外から受けた最初の支援は1950年のことであると述べたが、ギフト・ボックスの始まりについては、69号（1956年下級生号）に「ギフト・ボックスについて」と題してまとめられている。

4頁にわたる記事によればギフト･ボックスの始まりは､第一次世界大戦後まもなく、アメリカのJRCの団員が「誰かとお友達になりたい気持。どこかにお友達がいそうな気持。遠い知らない外国にもお友達が出来るといいなという気持」から始めたという。そういう温い、善意の心を表わし伝えるのに､「子供らしい方法」としてギフト･ボックスが発案された。

写真３．ギフト・ボックスの中身（2019年8月撮影）

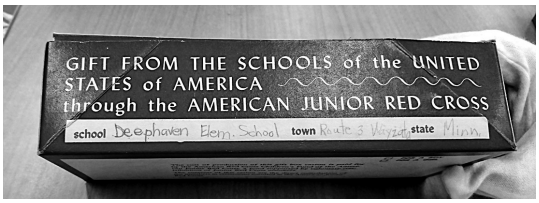

写真４．箱の側面（2019年8月撮影）

この思いつきを、アメリカ赤十字が経済的、技術的に主導し、全国的な活動にまとめた。具体的には、箱を全国的に規格化し、米国JRC「全国児童基金」（全国のJRC団員の寄付金を本社に積立ててある費用）から作製、参加希望の学校に配布した。その箱には、生徒自身が工夫し、自分たちの善意を伝えるのにふさわしい日用品、学用品、玩具を選び、作製したり買ったりして詰め合わせた（写真3）（注9）。費用は、一箱2ドル見当である。詰め終わったギフト・ボックスは再度支部を通して本社にあつめられ「全国児童基金」を活用して諸外国に輸送された。

記事によれば、1945年1月1日～1950年6月30日までアメリカの青少年赤十字が世界に送ったギフト・ボックスは266万4,342箱、受け取った国の数は40か国であり、1箱2ドルとして約532万ドルが使用された。

「どの箱にも、うけとった人がすぐ受取りを書くように、それをつめた学校の名前

を書いたお手紙用紙が入っています」（8号1950年3・4月号）とあり、写真4にあるように、箱の側面には、学校名、街の名前、州名が書かれていたことが確認できた。

前節でも提示したように、東京の本部に一括して送られたギフト・ボックスは、国内の日本赤十字団を経て全国に分配された。8号（1950年3・4月号）には、1950年1月8日に開催された東京JRC協議会の様子が掲載されている（下線引用者）。

> こんなにいいものがはいっているのを見たら、私だってとてもほしくなっちゃったけど、ギフト・ボックスのつくられた精神を思うと、私達よりもっと気の毒な人に送るべきだと思います。…中略…
> JRC団員も見たことがないから、アメリカの団員がしている事業の参考として、団に一個ずつは分けたほうがいいと思います［青少年赤十字8号　1950：8］。

話し合いの結果、1月15日に36か所の児童養護施設を慰問し、東京中の施設に2人に1個の割合で配布し、さらに全国の団に見本として1個ずつ配布することが決まった。日本赤十字団員がギフト・ボックスを施設に配布した時には、「駅まで見送ってくれたお友だちと、あくしゅしている団員のすがたもみられ、なかには次の訪ずれの日を約束しているものもありました」（8号1950年3・4月号）とあり、アメリカから贈られたギフト・ボックスを国内で配布する際にも、日本赤十字団員と施設の児童との間に交流が生み出されていたことがわかる。

世界各地の少年赤十字団の活動状況として、アメリカから支援を受け取る一方ではなく、送る側になる動きも報告されている。69号（1956年下級生号）には、「私達ももらうばかりであってはならないあげる身になってみたいものだ」と立ち上がった事例として、終戦10年後となる1955年に「私たちと同じ敗戦国の西ドイツJRC団員」がギフト・ボックスを外国に送り出したとある。この様子は、受ける喜びから贈る喜びへと成長したと形容される（下線引用者）。

> ギフト・ボックスの精神は金持の慈善事業ではないのです。「余りものが出来たから入れてやろう」じゃない、見たこともない人に対してさえ感じるあの純粋な人なつかしさを、子供なりに力一ぱいあらわそうとする人間らしい行動なのです。それだからこそ、ひとの不幸が気になってならない心につながって、親善から慰問となることにもなりましょう［青少年赤十字69号　1956：3］。

この西ドイツの事例などを踏まえて、日本でのギフト・ボックス活動については、

アンリ・デュナンの誕生日、「国際赤十字デー」である5月8日にギフト・ボックスを詰めてみてはどうかと呼びかけられている。まずは、機関誌が届く単位団、クラスで一箱を目標にして、ギフト・ボックスケースを5月号の付録にするとある。

ソルフェリーノの戦野に「みんな同じ人間どうし」と叫んで、そのために一生を捧げた赤十字創設者の誕生を記念するこの日に、私達の胸にも同じ思いがあって、見も知らぬ人々にさえ、『我が友よ』と呼びかけたいのを、実行によって立証するのは意義あることではないでしょうか［青少年赤十字69号　1956：4］。

日本の青少年赤十字団において自らギフト・ボックスを作るのに先立ち、アメリカJRCのギフト・ボックスの原則が以下のように参照されている。以下に、概略をまとめる。

一）「先ず第一に、この活動は交換ではないのですから一切返礼は期待しません。即ち、飽くまで純粋な友情の発露という発生の立場を尊重するわけです。」

二）教員はギフト･ボックス活動を教科に活用すること、特活、社会、絵画、工作、裁縫、数字、国語、英語など

・特別実行委員会を作る

・数学の時間に予算をたてる、クラスまたは分団で何個詰められるか計算する

・国語の時間には宣伝や公報、社会の時間には実際に買物の実習

・詰めるものを工作、裁縫

・受け取る方は地理や歴史など、礼状をだすため国語、英語、図画の教材

「御縁の出来た学校とは、将来ともその縁を育てて、やがて学校親善アルバム交換をするようになるまで指導したいものです。」

三）受け取る身になり詰める指導「この精神態度こそ奉仕や親善の大事な条件であり、徳育の内容の一つになります」

・受け取る対象は小学生、男女別

・送り先の国は指定不可「赤十字の海外支部職員や、赤十字社連盟の推薦で、米国赤十字の本社が決めるのです」

・価格は平等にするため2ドル相当

・心を込めて、手間をかけてよりよいものをいれる

「何でも買えばいい式で使ってしまう二弗と、心を砕いて使う二弗の違いです。例えば、材料だけは買っても手間は自分がかければ、出来たものを買うと高価な

人形でも、安くて心のこもったものが出来ましょう。」

・「何よりも自分の不用品を整理する位のつもりで、この活動を片附けてしまうことはいけません。使い古しのものを入れたりするのは以っての他です。」

・時間がかかるため、食べ物、壊れやすいもの（ガラス製品など）、危険物（花火など）は禁止［青少年赤十字69号　1956：4－5］

推奨される中身は、表4の通りである。

表4. アメリカ青少年赤十字の推奨されるギフト・ボックスの中身

（［青少年赤十字69号　1956：5］より作成）

分類	内容
日用品	櫛、歯ブラシ、歯磨、石鹸、小型タオル、手拭、ハンカチ、靴下、小型裁縫用具詰合せ、ヘアピン、ブローチ、安全ピン、先のとがらない鋏、風呂敷など
学用品	鉛筆、メモ、手帳、クレヨン、消しゴム、色鉛筆、定規、コンパスなど
玩具	小型楽器、小型のまり、こま、ヨーヨー、お手玉、おはじき、トランプ、ゲーム類、縫くるみの人形や動物、ビーズ、ハーモニカ、ピッコロ、民芸品など

ギフト・ボックスへの返礼については、「たとえ返礼は期待しない純然たる善意の贈物であっても、せめてその心が届いたかどうか知りたいのは人情です」と記され、受取人に負担をかけないように、ペンで書き込み、封をして投函すればいいように工夫された封緘用箋を同封することが推奨されている。こうして作製されたギフト・ボックスは特別委員会が検査し、学校JRC協議会の承認を経て、支部に届けられて最終検査を受け、最終的に本社を通じて諸外国に送付された。

以上を踏まえて、日本JRCのギフト・ボックスの原則は次のようにまとめられる。値段はアメリカが一箱2ドル、日本円で720円見当なので日本では一応500円とする。送る相手は小学生だけでなく、中学生、高校生でも可能であり、宛先を箱に朱書きする。アメリカではもっぱら外国向けだが、日本の場合は国内向けも扱うことにして、これも箱に朱書きする。受取の礼状はハガキにする。今回の締め切りは1956年5月8日の国際赤十字デーとする。

この日本製のギフト・ボックスの後日談は、「団員のページ　日本のギフト・ボックスはなんてすばらしいんだろう」と題されて73号（1956年9月下級生号）に掲載されている。5月8日赤十字デーを記念してつくられたギフト・ボックスは、神奈川県をはじめとして国内に700個以上、ソ連へ50個、中国へ50個、岐阜で開催された国際センターに参加した韓国、アメリカの代表50人にも贈られた。その感想は下記のようにしるされている。

日本のギフト・ボックスを贈られたお友だちは、『なんてすばらしいんだろう』とおおよろこびでした。本社では、早く、もっと多くの外国のお友だちに贈りたいとはりきっています［青少年赤十字73号　1956：15］。

その後、1971年の終刊まで『青少年赤十字』誌上でギフト・ボックスに関する記事はあまり掲載されないが、1958年に全国大会で決められた実践綱領、実践目標に次のように定められている（83号1958年小・中・高校共通号、以下の下線は筆者）。高校では、5月8日には必ず一団一冊のアルバムを作る、同じく一年一団一個のギフト・ボックスを作る、一団一枚の絵を海外に出す、学校交歓・家庭分宿をする、シスタースクールを持つ、外国の学校などと機関誌を交換する。中学校では、分宿交歓、ギフト・ボックスを国内外へおくろう、外国JRC団員との交歓会、外国人との個人的ペンフレンドを持とう、シスタースクール、一斉に親善アルバムを外国に送ろう。小学校では、外国のJRCのお友だちと仲良くお話したりする日をとくにきめましょう、よその県にきょうだい学校をつくりましょう、5月8日全国そろってギフト・ボックスのこうかんをします、よその県・よその学校のお友だちと交歓会をひらきましょう、とある。

以上から、数値目標としてはあまり多くないが、ギフト・ボックスの作製は、年間目標に組み込まれており、その作製、贈与、交換活動が根付いていったと考えられる。

日本からギフト・ボックスを贈る活動は、先述したように1956年から始まったが、受け取ったギフト・ボックスへの個別の返礼はそれより早くからみられる。先述したように、ギフト・ボックスの側面に書かれた学校名などを手掛かりにお返しが贈られている。ギフト・ボックスをうけとった1950年の翌年には、「ギフト・ボックスのお礼について」と題して注意事項が掲載されている（22号1951年12月）。記事によれば、ギフト・ボックスのお礼の送付が全国の支団から本社に依頼があるが、次のことに気を付けるようにとある。

中には大へん粗雑なものやよごれたもの、災害地の慰問にさえ不向のような自分たちの使い古したものなどがよくあって、折角心をこめた贈り物もかえって誤解を招くおそれがあります。その他外国に荷物を送る場合は重量、荷造、内容の外いろいろな制限があります。ですからこれらのことを考えた場合、日本からアメリカに対しては心をこめた手紙、絵、アルバムなどの方が喜ばれると思います。みなさんの手芸品など送るときは破損しにくいもので重量や型の小さいものを選んで下さい［青少年赤十字22号　1951：23］。

また、49号（1954年下級号）には、去年アメリカから送られたギフト・ボックスを受け取った鳥取県川跡小学校で、箱に日本の人形、コケシ、カルタなどを入れて送り返した。それを受けとったアメリカの小学生が自分の送ったギフト・ボックスに日本のいろいろなものがつまって帰って来たので大変おどろき喜んだと、アメリカ赤十字社からの礼文から掲載されている。

3.3.2　スクールチェスト

ギフト・ボックスと同時期にアメリカJRCが世界に送っていたのがスクールチェストである（11号1950年9.10月）。スクールチェストとは、アメリカの高等学校JRC団員が多くの学校用品、衛生用品を約5立方フィートの木箱につめ、世界中の学用品などの不足している学校へ赤十字連盟と連絡して送り出したものである。先述した通り、1947年から48年にかけて、北アトランティックと北パシフィックの両地区で試験的にはじめられ、当時毎年全アメリカの団で作製されていた。各学校の資金と団員の特別寄付金を利用して作成され、グループで稼いだお金も使われている。重さは1箱150ポンド（約68kg）で、中には鉛筆、ペン、クレヨン、ノート、石鹸、えのぐ、手拭、歯ブラシ、ソフトボール、ハーモニカ、衛生箱、同種類のものが何十組とまとめて、自分たちでつくった袋に入れてある。世界の歴史、現代アメリカなどの本も数冊入っていた。外国への輸送はアメリカJRC児童資金で賄っており、日本には40箱が送られた。1949年はアメリカからオーストラリアに41箱、ドイツ、フィリピンに48年から49年にかけて100箱送られた。

スクールチェストをもらった感想が次のように掲載されている（15号1951年5月）。藤枝高等学校では、2学期が始まり学校に来てみるとアメリカJRCからスクールチェストが届いていた。委員会を開き、各分団に分け配布した。

> 素晴らしい贈りものが入っていて、まるで宝箱でも開けるようでした。この贈りものは、アメリカのJRC団員が一生懸命に働き、報酬を得又お小遣をためた貴いお金で学用品や日用品を求め、我が国を始め各国へ贈られたのだと知った時、彼等に何といって感謝して良いか判断が出来なかった。…中略…
> 団員たちのこの貴い贈物の喜びはきっと親米感となって現われ、誰もが国際親善に努力しあらゆる奉仕に尽すと思います。またJ・R・C団員ばかりでなく育英会生徒にもと思い一点ずつ分配しました。彼等もきっとアメリカJ・R・Cの厚意に感謝していると思います［青少年赤十字15号　1951：33］。

見も知らない然しお話だけは毎日の様に聞いている遠いそして素晴しいアメリカのお友達から友情のプレゼントであるスクールチェストを贈られた私たちは本当に心から嬉しく思います。私たち藤枝高校青少年赤十字団員はいつももっともっとアメリカ及びその他の国々のお友達と仲良くなりたいと思っておりました。と思いがけなくアメリカの皆様からの素晴らしい贈物によって友情が結ばれたことはどんなに私達を喜ばせたでしょう。贈られたこのスクールチェストは私たちとアメリカのお友達との友情を友情のテープとして固く結びつけてくれました。このテープはなお他の国々のお友達にもなげられ次々と私達との友情は結ばれて行くでしょう。そうしてやがては世界中の人々が一人残らず手をつなぎ合うことでしょう［青少年赤十字15号　1951：33］。

終戦から6年後に、これだけの親米感が表現されている。これは、戦後のアメリカによる日本占領政策によるものだろうか。振り返ってみると、日清戦争、日露戦争の時にも、日本赤十字は対戦国であった清国兵、ロシア兵へ義手、義足、義眼等が日本兵同様に下賜されている［枡居・森　2018：58］。先述したように、赤十字社の理念として、戦時・戦後における敵味方の区別のない支援活動の結果であるといえるのではないだろうか。また、ギフト･ボックスの項でみたように、1956年に日本のギフト･ボックスがアメリカ・韓国のみならず、当時国交のないソ連、中国などにも贈られており、政府間の交流ではない赤十字ネットワークが存在していたことがわかる（注10）。

3.3.3　慰問袋、ギフトバッグ

アメリカJRC発祥のギフト・ボックス、スクールチェストの他にどのような支援の形があるか。これまでみてきたように、現金やおもちゃ、飾り物、人形、手工品などが合わせて贈られている。パッケージになっている形式といえば、慰問袋とギフトバックがあげられる。ギフト・ボックス、スクールチェストに比べると記事が各1件ずつと少なく、贈与や受取の実践というより作成を促す記事である。しかし、日本独自の取り組みという点では注目に値するだろう。

時期としては、慰問袋の方が登場が早い。1960年発行の104号に埼玉県JRCの取り組みとして慰問袋の作成が取り上げられている（104号1960年5月上級生号）。埼玉県のJRCでは、災害時の支援としての慰問袋の作成を行う。災害直後は多くの人々が支援活動を行うのでJRCではそれから後の活動として、特に学生であることを考えて内容を決める必要があると述べられている。JRC協議会、手紙など多様な方法で加盟校

へ広めて、学校単位でいつでも発送できるよう準備して、災害時は埼玉支部から相手の支部へ送る方法をとる。慰問袋の作成を選んだ理由としては、埼玉では経験のないことだから活動を希望する声があり、「日本、否や、世界に災害がなくなるとは思えないから」とある。また、JRCらしい仕事だから、学生生活上の負担過重はないためなどが理由としてあげられている。

慰問袋の作成上の注意として、必要な品物であること、相手と自分が楽しめること、「明日への希望がわくもの。(例. 本の選択やレクリエーション的なものを入れる等)」、JRCらしくあること、金銭的に無理でないこととして、内容は次のようなものが例示されている。

表５．推奨される慰問袋の内容（［青少年赤十字104号　1960：9］より作成）

分類	内容
薬品	脱脂綿、風邪薬、胃腸薬、包帯、軟膏、仁丹、ガーゼ
日常品	糸、針、ナイフ、ハサミ、手拭、ハンカチ、タオル、石鹸、歯ブラシ、歯磨粉、風呂敷、クシ
学用品	ノート、鉛筆、筆入れ、消しゴム、定規、コンパス、クレヨン
本	
遊び道具	

慰問袋は、20世紀前半に軍用、災害支援用として盛んに作成、贈与された［山口2011、2018］。戦後においては、兵士への慰問袋というイメージだけが残り、ほとんどが姿を消したが（注11)、この慰問袋は、時期的に考えても災害支援として戦前から継続したものと考えられる。

慰問袋の記事から10年後の1970年には、「ギフトバッグ」が登場する（195号1970年6月中学生号)。「『ギフトバッグ』の製作について」と題して、千葉県橘中学校から呼びかけられている。

「いつでも」「どこでも」「だれにでも」必要な援助や、必要な奉仕が与えられるようにしたい。災害の悲惨さを目のあたりに見てから、かわいそうだと思い、救援物資や救援金を集めることはだれにでもできるし、また、容易にできる。しかし、災害を受けたひとびとには、1分1秒を争う救助が必要なのである。赤十字の「先見」と「準備」、それに備えて常時活動の一つとしてギフトバッグを作成し、それを支部に保管し、必要に応じて直ちに援助の手がさしのべられるようにすることが大切である［青少年赤十字195号　1970：13］。

ギフトバッグの作り方は、手拭、ひもなどを使用して、縫い方も図示されている。

手拭を使用しているが、巾着ではなく、ショルダーバッグや手提げ袋、前掛けにもなる。また、手縫いが望ましく、それはほどくと手拭として使えるためである。

このギフトバッグに詰める内容として、ビニールふろしき、洗濯ばさみ、ほしひも、手拭、タオル、石鹸、歯ブラシ、歯みがき、えんぴつ、ノート、マッチ、ちり紙、はがき、針と糸、箸やスプーン、包帯、三角布などがあげられている。中味を一定にする必要はないが、基本的に考えられるものは日用品であり、誰が貰ってもよいように、おとなや子ども、男性や女性に関係なく、また、いつ貰ってもよいように季節差がなく、保存のきくものを準備しなければならない、とされている。

3.4　贈与対象

贈与対象は、これまでみてきたように基本的にJRCメンバー、戦災、自然災害で被災した子ども（乳幼児から高校生）が対象になっている。他に、患者、視覚障害者、老人などの社会的弱者への支援が若干みられた。

たとえば、56号（1955年4月上級生号）には、「病院などに愛の贈り物JRC大分県大会で」と題されて、大分県青少年赤十字の活動が報告されている。大分県青少年赤十字団は結成5周年を迎え、大分市春日小学校で小・中・高代表500名が集まり大会を開催した。そこでは、団員から寄せられた人形や花束等が、4名の代表によって病院の患者、恵まれぬ子ども、老人たちに贈られた。

また、同年夏には、アメリカから視覚障害者におもちゃが贈られた（57号1955年7月下級生号）。赤十字本社では、これを東京雑司ヶ谷にある特別支援学校に届けた。

他に、当時のソ連に残っている元日本兵への慰問品も募集されている（69号1956年4月下級生号）。『青少年赤十字』の編集発行人、青少年課長でもある本庄俊輔がソ連からの引き揚げ者を出迎えるためにナホトカへ行き、ソ連赤十字社沿海州の事務局長と交流した。双方の青少年赤十字団員からのお土産を交換した。ソ連側からは、ウラジオストク市28中学生徒の作ったアルバム・絵はがき帳ソ連赤十字製の衛生双六・童謡や民謡のレコードを受け取り、日本側からは子供の絵本や絵画・ソ連少年赤十字の写真を載せた日本の青少年赤十字機関誌などを渡した。その感想として、本庄は下記のように記している。

> この時私は、純真なみなさんの作品が人々の心を通じる上にどんなに役立つかをつくずく感じました。話合いが終ったあとの宴会の時もいろいろ青少年赤十字の話が出ましたが、今ソ連の青少年赤十字は保健衛生を中心に活動がすすめられているそうです。全国に六百万余りの団員がいて、自分の健康を向上させるためと、社会の

人々の健康のため互いに手を取り合って奉仕しているそうです。サブチエンコさんも、早く日本とソ連とが仲直りをして郵便小包で自由に作品のやりとりが出来る日のくるのを心から望んでいました。

…中略…

いま寒いソ連にはあと五年、十年と帰れない戦犯の方々が一、二七一名残っていますが、その中でも三百人ばかりは留守家族がなかったり、家人との連絡のつかない気の毒な人です。これらの人には、慰問品を贈る人もありませんから、次の引揚船の出るときは、皆さんも力をあわせて慰問品をおくりましょう［青少年赤十字69号 1956：11－12］。

先述したように、この時点においてソビエト連邦との国交は回復しておらず、そのような中でひとつのパイプとして青少年赤十字の活動が機能していることがわかる。

国際交流という点について、フィリピンとの事例を紹介する（15号1951年5月）。1951年3月8日に、フィリピンJRC部長から別便でフィリピンから人形を送った、日本からも送ってほしいとの航空便が来た。フィリピン下院議員フィリスベルロ. M. ヴェラノが、2月19日空路入京し、各地を視察、赤十字本社へ訪問した際に、津久戸小学校6年生ら6名が団員の作品（人形、アルバム、画）を手渡した。ヴェラノは、次のように話していた。

此国の若人たちは金銭は希望していない。友情を求めている。私は両国の青少年の間にのみ、この望みが持てる。日本人は現在運動に於ても東洋のチャンピオンになろうとしている。平和運動にもチャンピオンになってほしい。私のホテルの机の上には千通以上の日本の子供の手紙がのっている。その全てにディアー・フレンドと買いてある。心からの友情がこうして生まれて行く。このバッチは昨日、日本の子供からいただいたものだ。今度日本に来て私は多くの日本人の友情を知った［青少年赤十字15号　1951：35］。

上記の事例からは、日本が戦後に国際社会に復帰していくプロセスのひとつのチャンネルとして青少年赤十字の活動があったことがわかる。

４．おわりに

以上、戦後の青少年赤十字の活動の中から国際、国内における物のやりとり、支援活動についてみてきた。次の3点が指摘できる。

第一に、第二次世界大戦後の戦災支援としてアメリカの青少年赤十字団が世界的にギフト･ボックス､スクールチェストを贈っていたことが明らかになった。発案､作製､送付においてアメリカ青少年赤十字が中心的役割を果たしており、その後、たとえばドイツや日本などの受け取った側の国が贈る側になる事例が確認できた。また、アメリカから贈られてきた初発のギフト・ボックスへの日本からの直接の返礼も盛んに行われていたことも確認された。

第二に、戦災支援がひと段落したのちは、各国における自然災害への支援が行われていたことが確認できた。水害、火事、台風被害などへ国境を越えて情報がもたらされ、水や食料、医療支援といった喫緊の支援よりも、少年赤十字として子供を対象とした支援が行われていたという特徴がある。これは、大人が行う支援との違いとして青少年赤十字団においてよく意識されていた。子供を対象とした子供らしい支援、また、支援を介してはぐくまれる「友愛」「奉仕」「感謝」などが強調された。

第三にこれらの活動は、国際交流を目指して行われたものであるということが指摘できる。ギフト･ボックス､スクールチェストは､1950年代に盛んにおこなわれたが『青少年赤十字』が終わる1971年までに誌上にはあらわれなくなる。現代まで引き続き行われているのは、アルバム、グリーティングカードの交換などである。設立趣意にある「世界平和の為には各国児童互に親睦の情を表し且相互扶援の友情を以て通信の交換を為すことを目的及事業たらしめん」「各国赤十字社少年団の間に於て文書及作製品の交換を為すことに尽力せんことを望む」［日本赤十字社　1929：992-993］といった趣旨を貫徹するための活動内容となっている。

第一、二はつながっており、図1で指摘したような、数十年を経ての第三者への贈与としてではなく、少年赤十字団同士のギフト・ボックスの贈与においても支援のリレー、支援の応答性がすでに確認できた。1950年にアメリカから贈られてきたギフト・ボックスを真似て、他国にギフト・ボックスを贈る、ということが日本においては1956年からという非常に短期間で展開された。さらに、初期において、戦災復興のための贈与が、その後自然災害などを理由として贈られるようになり、それもまたアメリカから一方的に贈られるのではなく、各国の少年赤十字団が相互に贈り合う事象が確認できた（図4)。これは、「被災地のリレー」と同様に、「国際支援における善意のリレー」が認められたといえるだろう。さらに、渥美が阪神・淡路大震災のボランティア経験が発端となり、中越、東日本大震災、とリレーが進んだと指摘したその発端の役割を戦後のアメリカ少年赤十字団が果たしたと指摘できる。

さらに、渥美によれば、リレーをつなぐ動機について、災害において支援を受けた被災者が次なる災害において支援する側になったときに、復興が成立するという認識

があるという。「どこか他の被災地をお助けできた時、その時が、私たちの復興です」「（被災地支援の）リレーを完遂してはじめて過去の被災地の復興は一段落する」（括弧内は筆者）［渥美2015：123］と表現されるように、少年赤十字団同士の国際支援の場においても贈与主体となる、「あげる身となる」ことにより戦災からの復興、国際交流における対等性が成立していた、といえるだろう。

本稿において明らかにした第二次世界大戦後（第2期）におけるアメリカ少年赤十字団を中心とした国際交流のリレーがこの時期に独特のものなのか、少年赤十字団が活動していた第1期においてはどのような交流が行われていたかについては今後の課題としたい。

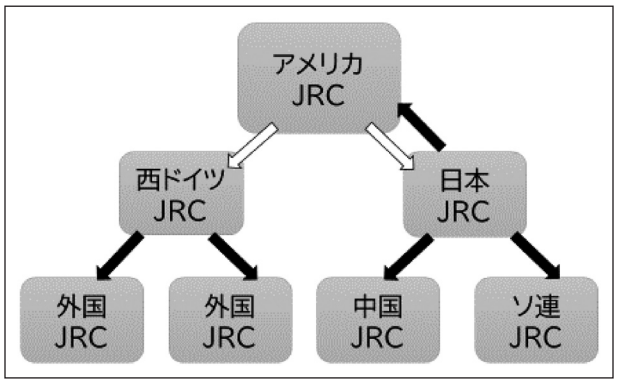

図４．戦後の青少年赤十字団同士の支援活動

注

（1）特定非営利活動法人難民を助ける会（AAR Japan）は、1979年にインドシナ難民を支援するために設立された国際NGOである。現在の海外事務局は東南・南アジア、中央･西アジア、アフリカの18か所、事業内容は、緊急支援、障がい者支援、地雷対策、感染症対策、啓発活動などがある（AAR Japan HPより引用、https://www.aarjapan.gr.jp/、2020年11月9日閲覧）。

（2）1965年ウィーンで開催された第20回赤十字国際会議で宣言された赤十字の基本原則は次のようである。「人道：国際赤十字・赤新月運動（以下、「赤十字」と記す）は、戦時において差別なく負傷者に救護を与えたいという願いから生まれ、あらゆる状況下において人間の苦痛を予防し軽減することに、国際的、国内的に努力する。その目的は生命と健康を守り、人間の尊重を確保することにある。赤十字は、すべての国民間の相互理解、友情、協力及び堅固な平和を助長する。公平：赤十字は、国籍、人種、宗教、社会的又は政治的意見によるいかなる差別もしな

い。赤十字はただ苦痛の度合いに従って個人を救うことに努め、その場合、最も急を要する困苦を真っ先に取り扱う。中立：すべての人々からいつも信頼を受けるために、赤十字は戦闘行為の時、いずれの側にも加わることを控え、いかなる場合にも政治的、人種的、宗教的又は思想的性格の紛争には参加しない」［ピクテ　2010：xi］（下線引用者）。

(3)『少年赤十字』は1943年頃まで『博愛』の付属別号などの形で続いたらしいが、現物としては1939年1月発行の14巻1号までしか残っておらず廃刊の時期などは不明である［枡居2002：53］。

(4) これらの資料は、日本赤十字本社の情報プラザで保管され閲覧が可能である。

(5) アルバムは、赤十字を持っている国は特別なところをのぞきどことでも交換できる。アメリカだけでなくインド、パキスタン、シャム、フィリピン、オーストラリア、イタリアは日本との交換を非常に希望していると書かれている［青少年赤十字22号　1951：23］。

(6) 集中豪雨によりカンザス州ネオショー川が氾濫し、死者15名、被害8億ドルであった（「アメリカの気候と自然e-ガイド」より引用、http://jlifeus.com/e-pedia/08.climate&disasters/02.storms/ptext/06.flood.htm、2020年10月23日閲覧）。この災害については、朝日新聞紙上においても「大水、変じて火の海　米国カンサス・シティー」と題されて報道されている（朝日新聞1951年7月15日）。

(7) 昭和28年西日本水害、1953年6月25～29日にかけて梅雨前線による集中豪雨、福岡、佐賀、熊本、大分に水害が発生した。死者行方不明者1,013名、建物被害は全半壊34,655棟、浸水454,643棟であった［京都大学防災研究所　2011：153］。

(8) 1956年8月18日23時45分頃、出火元は駅前の旅館、台風9号通過後のフェーン現象による強風にあおられ市街地一帯が消失、負傷者16名、消失家屋は650棟であったという（Yahoo天気・災害「大館大火（1956）」より引用、https://typhoon.yahoo.co.jp/weather/calendar/251/、2020年10月30日閲覧）。

(9) アルバムと同じく赤十字情報プラザには、ギフト・ボックスの実物が保存されている。3箱の中身はいずれも異なっていた。1956年発行の青少年赤十字69号にも写真が掲載されているが、同じ箱が使用されていた。

(10) ソビエト連邦と日本が国交を回復したのは1956年10月署名、12月に発効した日ソ共同宣言を待たなければいけない。中国とは、1972年9月の日中共同声明によって日中国交正常化がなされた。

(11) 朝日新聞紙上においては、1952年5月13日にソ連に抑留中の日本人戦犯に衣類や慰問袋の通信許可がでたという事例、1957年2月26日に北海道冷害地の子供た

ちへ東京の小学生・幼稚園児から慰問袋が贈られたという事例、1959年11月22日に伊勢湾台風被害にあった子どもたちへ静岡県のこども会連合会が慰問袋を贈ったという事例が掲載されている。その後は、関連記事が途絶え1980年には滋賀県の防衛協会婦人部が同県出身者の自衛隊員に激励の為慰問袋を贈っていたがそれが「繰り返すな“銃後の守り”」「泣いた日を忘れたのか」と批判的に報道されている。

参考文献

渥美公秀　2012「被災地のリレーから広域ユイへ」『人間関係研究』11：1-12.

北原糸子　2011『関東大震災の社会史』朝日新聞出版

北原糸子　2014『津波災害と近代日本』吉川弘文館

京都大学防災研究所監修･寶馨、戸田圭一、橋本学編　2011『自然災害と防災の事典』丸善出版株式会社

小池政行　2010『「赤十字」とは何か――人道と政治』藤原書店

滋賀県青少年赤十字のあゆみ編集委員会　2017『滋賀県青少年赤十字のあゆみ』日本赤十字社滋賀県支部

枡居孝　2002『雑誌「少年赤十字」と絵本画家　岡本帰一』竹林館

枡居孝、森正尚　2018『第二版　世界と日本の赤十字――世界最大の人道支援機関の活動』東信堂

名古屋市総務局調査課編　1961『伊勢湾台風災害誌』名古屋市

日本赤十字社　1929『日本赤十字社史続稿下巻』

日本赤十字社　1957『日本赤十字社史続稿』第4巻

日本赤十字社　1969『日本赤十字社史稿』第5巻

日本赤十字社　1972『日本赤十字社史稿』第6巻

日本赤十字社　1986『日本赤十字社史稿』第7巻

日本赤十字社　1988『日本赤十字社史稿』第8巻

日本赤十字社　1991『日本赤十字社史稿』第9巻

日本赤十字社　1999『日本赤十字社史稿』第10巻

日本赤十字社　2011『日本赤十字社史稿』第11巻

日本赤十字社　1979『人道――その歩み　日本赤十字社百年史』株式会社共同通信社

ジャン・ピクテ　2010『解説　赤十字の基本原則〔第2版〕』井上忠男訳　東信堂

水出幸輝　2019『〈災後〉の記憶史――メディアにみる関東大震災・伊勢湾台風』人文書院

三谷はるよ　2015「一般交換としての震災ボランティア――『被災地のリレー』現象に関する実証分析」『理論と方法』30（1）：69-83.
山口睦　2011「戦時下の贈与――近代日本社会における国民的贈与の創出」『文化人類学』76（3）：237-256.
山口睦　2012『贈答の近代――人類学からみた贈与交換と日本社会』東北大学出版会
山口睦　2016「災害支援と贈与――20世紀前半の婦人会活動を事例として」岸上伸啓編『贈与論再考――人間はなぜ他者に与えるのか』臨川書店
山口睦　2018「災害支援としての慰問袋――20世紀前半の新聞記事を資料として」『やまぐち地域社会研究』15：45-64.
柳瀬房子　1995『地球をつつむ「愛のポシェット」』大日本図書
『青少年赤十字』1～195　（1949～1969）
Junior Red Cross Information 2018（青少年赤十字指導情報167号）日本赤十字社